



令和7年12月に誕生した星野リゾート「リゾナーレ下関」。

前田市長と、代表・星野佳路氏、総支配人・鈴木良隆氏が、下関の新たな旅のカタチと将来像を語り合いました。

下関のポテンシャルが動き出す 星野リゾートが 関門海峡を選んだ理由 × 市長対談

新春座談会

SHINSHUN
ZADANKAI



下関市長

前田 晋太郎 まえだ しんたろう

市民と共に歩むまちづくりを推進。

観光を軸とした地域経済の活性化に注力し、民間との連携による「選ばれるまち・下関」を目指している。

新たな観光の物語を、市民と共に育てたい！

星野リゾート代表

星野 佳路 ほしの よしはる

長野県出身。

慶應義塾大学経済学部を卒業後、米国コーネル大学ホテル経営大学院修士を修了。

1991年に星野温泉旅館（現・星野リゾート）代表に就任。

観光による地域再生の先駆者として知られる。年間80日のスキー滑走をしている。

海峡の迫力、歴史の厚みに感動しました！

リゾナーレ下関 総支配人

鈴木 良隆 すずき よしたか

埼玉県出身。

軽井沢ホテルブレストンコート、奥入瀬溪流ホテル（料飲ユニットディレクター）、リゾナーレ那須（総支配人）を経験し、リゾナーレ下関総支配人に着任。

開業準備段階から地域との交流を重ね、地元の文化・食・人を生かしたリゾート運営に取り組んでいる。

ワインソムリエの資格を保有。趣味は釣り。

地域と共に成長するリゾートを目指します！



下関のポテンシャルに
魅力を感じています。



建物は、すべて曲線で構成されている。見る角度によって、さまざまに表情を変える。船の帆に見えたり、うねる波だったり。

市長 新年明けましておめでとうございます。昨年末の

「リゾナーレ下関」の開業は、長年の課題だった「滞在型観光への転換」に大きな追い風となりました。本日は、今後の下関観光の可能性について、率直にお話を伺いたいと思います。

星野代表・鈴木総支配人（以下、敬称略） よろしくお願

「星野リゾート」の選択

市長 まず、数ある地域の中から、なぜ下関を選ばれたのでしょうか。

星野 私たちが最も重視したのは「地域全体で良くしてこうとする姿勢」です。一つのホテルだけでは観光地の魅力は変わりません。全187室が、満室になったとしても、街の活性化への貢献は限定的です。そして、重要なのが「対岸」の存在です。

市長 北九州市ですね。

星野 観光客、特に海外の方にとっては、自治体の境界

など関係ない。関門海峡の魅力伝えていくとき、両岸でコーディネートされていることが世界の中での評価に影響すると思うんです。

市長 実は昨年、関門エリアは「世界の持続可能な観光地100選」を受賞したんです。

星野 素晴らしいですね。私たちが下関にポテンシャルを感じたのは、海峡沿いのエリア全体を良くしていくという市の方針、北九州側との連携姿勢。こういうことが、この土地の長期的なサステナビリティを高め、事業リスクが軽減される。すごく魅力的な場所に感じました。二つの新しいホテルだけで集客し続ける」というのは、長期的にはリスクが高いんです。

地域が良くなれば、ホテルも良くなる。ホテルが集客すれば、周囲にもプラスが循環する。その良い流れを

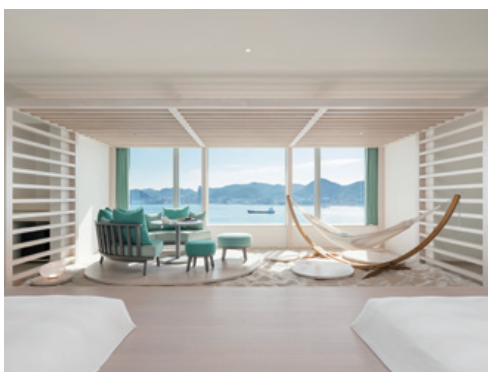
どうつくるかが大事なので。

市のマスタープランへの参加を歓迎していただいたことが、私たちの背中を押しました。

市長 プラン策定の初期段階から、星野代表と議論できたことは大きな財産でした。

星野 港湾開発の成功事例として知られるシドニーを一緒に視察したことで、共通言語が持てました。「世界ではこうしている」という認識を共有できたことで、マスタープランの目指す未来が高いレベルで一致したと思います。

関門海峡のブランド価値を
上げていただいた。



海峡カバナスイート（4名定員・76㎡）
リビングに砂浜が広がり、まるでプライベートビーチにいるような空間が特徴。



市長 本当にそうですね。

星野 マスタープランは、作る過程がすごく大事だと思っています。もちろん、これから実現していくのは、もっと大事なだけ。

市長 星野代表に初めて海峡沿いの現地をご覧いただいた時のことを鮮明に覚えているんです。あの時、代表は私にこう言ったんです。「勘違いしてた。こんなにすごいと思わなかった」って。

星野 そうでした。実際に立ってみると圧倒されました。コロナ禍などの困難もありましたが、ここに長期的な可能性を感じて丹念に計画を磨いてきました。

市長 こんなに素晴らしいホテルを造っていただき、市民も喜んでくれると思います。

「海峡のデザイナーズホテル」
市長 ホテルのコンセプトについて伺えますか。

鈴木 実は何度も計画を見

直しました。最終的には「海峡のデザイナーズホテル」に行き着きました。リゾナーレブランドで「ゼロからつくり上げた」のは今回が初めてだったんです。

市長 今までは、再生案件が中心だったんですね。

鈴木 はい。今回は、建築設計の段階から細部までこだわりました。

星野 リゾナーレのターゲットは、大人の滞在もありますが、子ども連れ、ファミリーも多いです。ただ、子ども向けに寄せ過ぎると大人に敬遠されてしまうんです。

市長 その境界線が、難しいところなんですね。



クライン ダイサム アーキテクトのアストリッド・クライン氏(左)と福岡有紀氏(中央)が内装デザインを、日本設計の塚川譲氏(右)が建築デザインを担当。

あるかぼーと・唐戸エリア マスタープラン

下関市と星野リゾートは、「あるかぼーと・唐戸エリア マスタープラン」を協働で策定し、関門エリアが「日本を代表するウォーターフロントシティ」となるよう取り組んでいます。マスタープランは、長期的で段階的な整備を計画しており、その第一弾が「リゾナーレ下関」の開業です。星野代表は、「先陣を切る私たちの責任は非常に大きい。次の段階がスムーズに進むよう、しっかりと取り組みたい」と話します。





下関の皆さんの
期待を裏切れない。

星野 ホテルの最大の課題が平準化なんです。夏休みは、ファミリー。秋は、大人の滞在。2月は、インバウンド。デザイナーズホテルという概念は、どのマーケットにも刺さるキーワードなんです。

鈴木 「デザインする」という言葉には、①海峡のロケーション、②お客様の滞在そのものをデザインするという2つの意味を込めています。

星野 もう一つ。マスター

プランの説明会や評価委員会の中で、市民の皆さんが懸念されていた「景観への影響」には細心の注意を払いました。海峡と街に溶け込む外観を追求し、たどり着いたのが「曲線」だったんです。アートのオブジェを置いたような外観にしてほしいと。外観設計のデザインをしていただいた日本設計の塚川譲氏には相当頑張っていたいただきました。建築で曲線をつくるのは、結構大変でコストも手間もかかるんです。でも我々はそこを重視しました。

市長 驚きましたよ。エレベーターを降りて、部屋までの廊下が曲線で構成されていて湾曲してるんですね。

星野 廊下の湾曲は、外観設計の結果生まれた副産物です。この場所で、理解を得て受け入れていただくには、大事な投資だと思いました。

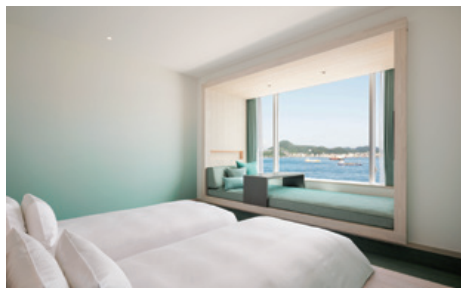
市長 昭和62年に、あるか

時から、常に市民の皆さんから景観をふさいでしまう懸念の声が出ていて、私はこれをどうクリアするか、ずっと格闘してきました。驚いています。今そういった声は全く聞かれません。デザインが、市民の「海峡観」と調和しているんだと思います。

星野 景観は永続的な資産です。街の象徴として誇れるものにするために、何度も検証を重ねました。

市長 市としても、この絶好の機会を逃すわけにはいかなないと考え、海響館や唐戸市場のリニューアルなど、エリアの活気を生み出せるよう、いろんな政策に反映していきたいと思っています。

全客室から海峡ビューを楽しめます。



左上：スーペリア(3名定員・38㎡) 右上：デラックスフォース(4名定員・53㎡)
左下：スーペリアダブル(2名定員・38㎡) 右下：愛犬ルーム(4名定員・53㎡)





「ホテルが果たす役割」

星野 私たちが新規に展開するときに重視するのは「既存のホテルと競合しないこと」です。単価を下げると、パイの取り合いになるだけです。地域の経済効果を高めるには、新しい需要を生み出していかなければなりません。そこも何回か計画が変わった要因の一つです。下関には素晴らしい観光資源があります。狙うべきは、ビジネス客ではなく、リゾート・観光客。3世代のファミリーでも過ごせる設計にすれば、結果的に部屋単価

が上がり、既存のビジネスホテルとは直接競合しない存在になり得る。むしろ補完関係を築けます。

市長 宿泊客は、ホテルのレストランで食事をするのでしょうか。ホテルの外で食事されることを、市内の飲食業が期待していますが。

鈴木 ホテルのレストランだけでは、すべての宿泊者を賄えません。周辺に飲食店も多いので、そもそも宿泊プランに食事は付けていません。

市長 えっ？

鈴木 宿泊者の4割程度が周辺の飲食店を利用されると見込んでいます。

星野 今後の観光を考える上で大事なのは「連泊」です。**市長** 1泊にとどまらず、2〜3泊することだと。

星野 ええ。泊数が増えるほど、ホテル内で食事をする人が減っていくんです。毎日、同じレストランに行くよりも周辺の飲食店に行つてみ

ようとか、そういう時間も余裕も生まれる。地域との連携は自然と強まります。

鈴木 星野リゾートでは、宿泊者用のアクティビティを充実させるなど、連泊を強く促進しています。

星野 さらに、連泊は、SDGsにも沿います。観光産業が出している二酸化炭素は、半分が「移動」です。例えば、年間10泊の観光旅行をする人が、1泊を10回ではなく、2泊を5回にしてもらうと、1泊当たりの二酸化炭素排出量が半分になります。移動コストも同時に減るので同じ予算で旅行回数を増やすこともできます。また、消費の仕方にも変化が現れます。旅行金額の約3分の1は交通費なんです。これは、J.Rや航空会社の収益で、地元には落ちません。連泊が増えるほど観光消費の多くが地元に戻る。SDGsにも地域経済にも良い構

造です。観光地経営にとって重要な視点です。

市長 私は、多くの方に、この関門海峡の景色をゆっくり見てほしいと、ずっと思っていたんです。関門海峡は、1日に何度も流れが変わるし、朝夕夜とで趣が変わり、いろんな船舶が通航します。連泊して、いろんな表情をじっくり見てほしいですね。

鈴木 海響館、唐戸市場、船で巖流島や門司港へ。火の山公園もあるし、1泊では到底足りないです。

星野 魅力が一つずつ磨かれれば、地元への経済効果は大きく変わると思えますね。

「下関観光の未来」

市長 最後に、この街への期待をお聞かせください。

鈴木 街の方々から温かい声を多く頂き、すぐく応援していただいています。裏切れないという感覚で、地域にとってプラスになる形を追

及していきたいです。

市長 星野リゾートは、地域に入り込んでくださるのが魅力だと思っています。今日も、スタッフの皆さんの笑顔、柔らかなウェルカムな雰囲気、素晴らしいですね。下関市民の意識も変わるんじゃないかなと思っています。

星野 一つのホテルだけでなく地域が良くなるわけではありません。マスタープランをさらに進めていくことが大事で、その機運を高めるために「下関には日本を代表する観光地になるポテンシャルがある」と示す役割があると思っています。そして、ハード面の充実だけでは持続可能な観光地にはなりません。ソフト面を継続的に進化させていくには、DMO※の機能が非常に重要です。今後、その活動にも関わっていきたいと考えています。

市長 本日は、貴重なお話をありがとうございました。

※DMO：観光地域づくり法人。地域の観光資源を生かし、戦略づくりから運営、情報発信まで体系的に担う組織。行政・民間・地域が連携し、持続可能な観光地経営を進める役割を持つ。



グルメ

左・中央：メインダイニング「OTTO SETTE SHIMONOSEKI」 右：ビュッフェダイニング「PUKU PUKU」

どちらも下関ならではの食体験が楽しめる内容になっている。メインダイニングでは、デザートと前菜以外はすべての料理にフグを使用したイタリア料理のコースを提供し、今までにない新しいフグ料理を楽しむ。ビュッフェではフグを使った料理はもちろんのこと、郷土料理の瓦そばなど、豊富なメニューが用意されている。



Books & Cafe（宿泊者以外も利用可）

窓からは関門海峡が見える開放的なカフェ。海の生き物や下関にまつわる書籍などおよそ500冊の本を自由に読むことができる。オリジナルのカップケーキとドリンクのセットなどを楽しみながらくつろぎの時間を過ごせる。



ふぐプール

上：インフィニティプール

水面が海や空と一体となるような設計。プールの水には関門海峡の海水も一部使用されている。

下：全天候型屋内プール

大胆で遊び心のあるデザインの全天候型屋内プール。



アクティビティ

上：海響館講座

海響館が世界一の“ふく”の展示種数を誇るという特徴を生かし、フグにフォーカスした講座で、つい海響館に見に行ってみたくなるような内容に仕上げ、周辺観光を促進する。

下：はじめての関門海峡

海船の交通ルールを楽しみながら学べる内容だ。

この景色とともに始まる、下関の新しい旅づくり。

